

研 究 紀 要

図 書 館 部 会

講 演

「変わる図書館サービス」

函館市中央図書館 前館長 丹 羽 秀 人 …… 1

「図書館多譚 ～本を読むこと、つくること～」

文筆家 世 良 啓 …… 3

研 究 発 表

「利用しやすい図書館を目指して」

青森県立八戸東高等学校 手 嶋 久 敦 ……

「本校での図書館の活動」

青森県立三本木農業恵拓高等学校 田 中 館 優 子 ……

講 評

青森県高教研図書館部会 副部会長（青森県弘前高等学校 教頭）伊 藤 文 一 …

図 書 館 部 会

講演 1

「変化する図書館サービス」

前函館市中央図書館館長 丹 羽 秀 人

1 私と学校図書館との出会い

(1) 小学校3年から高校3年まで毎年図書委員

父親の転勤についてまわって転校を経験した。小学校3年から高校3年までずっと図書委員をやっていたので、学校図書館は私のホームグラウンドのようなものであった。教室でやることがないと図書館に足を運んでいた。図書館があったおかげで成長できた。

(2) 大学時代、附属中高図書館でのアルバイト

大学では附属中高図書館のアルバイトをした。9年間の図書委員の経験もあり、すぐに仕事を覚えた。今考えるとそこで図書館の仕事のほとんどを経験できてありがたかった。

(3) (株) 学校図書サービス入社後、営業として学校図書館と付き合い

プリントセンター（NHKの子会社・資料室の整理部門）で働きながら図書館司書の資格をとった。プリントセンターは新採用をとらないということだったので学校図書サービス（首都圏・近畿圏）を受け、就職した。そこで営業職として小中高大・公共図書館等の図書館等とつながりができ、先生方から依頼があればなんでもやった。その後兄弟会社である図書館流通センターに転籍後は、札幌に営業所を設けて仕事をした。ちょうど1990年代以降は予算が多くつき、毎年多くの図書館がつくられた時期であった。市長や町長には「図書館をつくる」ことを公約に掲げる人もいて、どんどん図書館ができ、私はその手助けの仕事をしていた。中には本をほとんど選んであげた図書館もある。

2 石狩市民図書館を立ち上げる

(1) 石狩市に図書館開設準備室主査として採用

石狩市に転職後、すぐの大きな仕事は設計者を選ぶことであった。プロポーザルで環境設計に選定したが、図書館経験が少ない設計者のため、図書館情報大学の教授にアドバイザーとしての参加を依頼した。開館時は4万冊しかなく、ガラガラでクレームが来たくらいであったが、直ぐに一杯になると思ってたく気にしなかった。10年で開架はほぼ埋まった。市民に寄り添う図書館を目指して竣工前にフォーラムを開いた。平成12年6月開館式を行った。過去に私が出た開館式はすべて快晴だったが、この日はあいにくの雨であった。来賓だけではなく一般市民を呼びたいと考え、プログラムを構成したが、予想をはるかに上回る4,500人ほどが来館した（実際は5,000人を超えていた）。初日は2hだけの開館だったが、この日の貸し出し冊数はいまだに更新されていない。

(2) いくつもの賞を受賞した評価の高い建築

石狩市民図書館は北欧の図書館を参考にして建築した。床面積が3,800㎡、一階の開架部分が1,600㎡あり、カラフルな書架が置いてある。2階は郷土資料、視聴覚ホールは70人収容。「図書館の中にまちをつくる」というコンセプトで、喫茶コーナーには新鮮な野菜等も置いており、すぐに売れてしまう。

3 歴史ある函館市立中央図書館の運営

石狩市に18年勤務したのち、明治から続く歴史ある函館市の図書館の館長として赴任し運営を引き受ける。日常の業務に大差はないが、一番違うのは指定管理だと議会対応がないことであった。石狩市の場合は設計から毎回打ち合わせに参加し、建築現場にも足しげく通うなど密に関わったが、通常公共建築は建築の担当者がほぼ担当し、現場の意見はあまり取り入れられない。

旧市立函館図書館の建物は現在も残っているが、見るたび心が引きしめる。函館市中央図書館は床面積7,600㎡、一

階の開架部分 3,200 m²（石狩市の倍）、展示スペースある。石川啄木の原稿の大半は函館図書館がもっている。視聴覚ホールは152人収容でき、毎年秋には馳星周をはじめとする作家を呼んで講演をしていただいている。しかし、開館から20年ほどたち、建物とシステムは当然のことながら時代から遅れてきているのを実感している。

4 図書館はどう変わっていくか

将来的にはICチップ（図書館用）の導入が予想されるが、新設でなくては初期費用や手間を考えると難しい。もし導入されれば、蔵書点検はだいぶ楽になる。また、ロボットが本をみつけるような自動書庫（閉架）ではICチップが役に立つ。ただし、地震に弱い。

コロナ禍で電子書籍が飛躍的に伸びた（電子書籍しか出ないものもある）。本がなくならないという根拠はなく、樂觀視はできない。現に、出版界の売り上げは20世紀の終わりに比し半減している。産業としての出版はものすごく衰退しており、書店や取次ぎがどんどんつぶれている。出版社は電子書籍を図書館に置きたがらず、種類も少ないが、この3年で飛躍的に増えてきた。もし電子書籍が主流になるとしたら、サービス内容を変えないと職員はあまりいらなくなるかもしれない。

電子書籍と違うが、図書館は時間資料のデジタル化を進めている。函館市中央図書館のデジタル資料館は大変おもしろいのでぜひ閲覧してほしい。このようなデータベースは維持が難しい。函館は大学の助力を得て上手く運用している。今、大学図書館が一番進化している。大学では、ラーニングコモンズが取り入れられ、学生たちは机をどんどん動かして、みんなでわいわいと話し合いをするなどしている。おしゃべりが自由なので、逆に静かに読書する場所を別に設けている。いずれ、高校や公共図書館にもそういう波が来ると思う。

これからの公共図書館は、読書以外の目的も含めて、人が集まってくる場所に変わっていくことが求められる。ツールは多様化するので、それに対応する図書館になっていかなければならない。個人的には、あまりに電気を使う機械に頼るのは少し心配している。オンデマンド出版に変わるかもしれないがこれから先も本は絶対になくならないはずだ。

質疑応答

- ・ 学校図書館はどうか変わっていけばいいのか。また、どんなふうになっていくと思うか。【青森北高校 柴田T】
→ 現状では、小中高の図書館は大学ほど変わっていない。変わってきているとしたら、インターネット社会になり、調べるということが増えている。今後も、本を読むことより調べることが多くなるのではないかな。そのための資料や環境が必要である。

講演2

「図書館多譚～本をよむこと・つくること～」

文筆家 世良 啓

1 はじめに

本講演のタイトル「図書館多譚」副題が本をよむこと・つくること。昨年12月に出版した「弘前多譚」にちなんだ図書館にまつわる内容である。

2 プロローグ

(1) 青森県高等学校教育研究会の成り立ち

青森県高等学校教育研究会（以後：高教研）は1956年に設立され、今年で66年となる。図書部会は設立当初からある部会で大事に思われてきた部会である。高教研の目的は、高等学校教育の振興発展させることとある。そして、会員相互の親睦をはかることも目的となっている。

(2) 「図書館+多譚」学校と図書館のあれこれ

本講演のタイトルともなっており、造語となっている。図書館と青森県の教育について考察を加えます。青森はコンテンツの宝庫であることを理解すること。青森で生まれ育つデメリット・メリットが何か理解をする。そして、青森が何の王国であるかを理解すること。図書館・博物館・美術館の整備と活用を伝える。

3 本をよむということ

(1) 「3つ」の居場所

人には「3つ」の居場所があると言われる。それが「家・学校・場所」である。私に置き換えると、幼いころから図書館へ通うことが多く、3つ目の居場所である「場所」が図書館だった。

(2) 生活の中の図書館

移り住んだ町にあった図書館。板柳、七戸、青森、むつ、三沢、弘前など移り住んだ町にはそれぞれ立派な図書館があった。特に郷土史や郷土文学に力を入れている図書館が多かった印象がある。また、図書館も様々で収集する人の意図やどういう図書館にしたいかということが、建物や収集された所蔵本に表れていることに、気づいた。

4 本をつくるということ

○「むうぞく」（主宰・猿不次男）への参加

大学生の折、母校（弘前高校）へ伺った際に、編集に誘われ、やがて小説や詩を書くようになった。音楽家の川村昇一郎先生、俳人の泉風信子さんなどが参画していた。

○「北奥氣圏」（主宰・船越素子） 「むうぞく」終了後に参加

弘前中央高校の同僚・船越素子先生から誘われた。船越先生とは青森県で開催された全国高等学校総合文化祭の文芸部門のお手伝いをする事になった。その際、等身大の太宰治（津島修治）と寺山修司を製作し、「どっちのシェーショウ」というテーマで展示を行った。この時の展示は、全国高校生などにも好評を博し、全国的に青森県には多くの文学者がいたことを理解していただけた。

○「瑠璃」（主宰・山川遊而）

主宰者から誘われる形で、参加し小説や詩を書いた。

○第1回東奥文学賞受賞について

高等学校を早期退職後に、子育てや介護に専念した。その傍ら、小説を書いたり、太宰治全集を読み、寺山修司について調査しながら、青森県近代文学館の調査員をした。そして、第1回東奥文学賞に応募して、大賞を受賞した。当時、長谷部日出雄氏と三浦雅士氏が審査員を務めていた。この両氏は、共に弘前高校出身。長谷部氏は、地方出版で初めての直木賞を受賞した作家で、「青森高校に寺山、弘前高校に長谷部」と言われた人物。直木賞受賞作品「津軽世去れ節」は津軽三味線を題材にした作品で、津軽及び津軽三味線ブームを呼び起こした。そして、三浦氏は、生前の寺山修司と懇意にしていた関係で、文学碑の製作や寺山修司記念館に関係していた。

○出版物について

①「千空さんに俳句を習う」(2021年7月7日・青森文芸出版より刊行)

五所川原高校勤務時に図書館部会の講演で、俳人の成田千空さんが講師でおいでになり、高校生に向けて講演した内容に興味を持った。後に成田さんに俳句を習い、感じたことをまとめたのがこの一冊である。最初は佐々木達司氏より成田さんのことを書いてみないかとお誘いを受け、千空研究会の新聞に連載した。その後、佐々木氏が亡くなり、一周忌を偲ぶ一冊の本として刊行した。

②「アオモリ文藝」創刊号(青森文芸出版PR誌)、第2号

この冊子は、佐々木達司氏らが設立した「青森文芸出版」のPR誌。佐々木氏らは青森での文芸活動のために、自ら印刷会社を作って本を出版した。そこから青森文芸出版を立ち上げた。その志を何らかの形で継ぎたいと考えている。

③「弘前多譚」(2022年12月1日・北方新社 エッセイ集)

この本は『月刊「弘前」』(文芸タウン誌)に2011年からの10年間「多々他譚」をまとめた内容となっている。この『月刊「弘前」』を作ったのが、津軽書房の高橋彰一氏である。高橋氏は、長谷部日出雄氏の直木賞受賞作「津軽世去れ節」を刊行した人物である。

青森県はかつて出版王国と呼ばれていた。本をつくる人々(書き手、編集者など)の思いが刊行された本たちにあった。特に現在では貴重となってしまった、郷土史が優れていて、中央にある本にはないことが書かれていた。そこには優れた書き手や出版人が存在していたことになる。自らが書かなければつくらなければ、残らない歴史や文化がある、こういう思いで地方の現状を小説の中で訴えていた。それが、全国的にも有名な作家や芸術家を生んでいった背景だろうと考える。

5 図書館と青森県教育

①すべての教科は歴史である。 歴史は過去がつくる、歴史は未来がつくる。

教諭時代に図書部勤務の折に教わったこと。そして、自ら教科を教えながら考察したこと。

図書館にあるもの全部、亡くなった人の本、現在も活躍している人の本が過去であり未来である。私たちがどこからきてどこへ向かうのか過去と未来でできている。このように考えると図書館にはありとあらゆる過去と未来がある。学校教育に置き換えると全教科の過去と未来があることになる。それを整理保存し、生徒に向け情報公開をし、読書や選書のアドバイスをする仕事は、授業を担当する先生方が片手間で出来るような仕事量ではない。しっかりと活用するならば、知識の宝庫であり、進路対策や小論文対策の基地となり、生徒の未来をつくる場所になる。

②指導要領は文部科学省の都合で10年ごとに変わるもの

不易と流行・・・変わっても変わらないものは何か

何を青森県の子供たちに伝えるのか

我々は現在、激動の時代を生きている。生きていることが学ぶことと直接つながっている。生きることが生きやすくなれるように、自らが経験しながら、青森に生まれて育っていることのメリットとデメリットを知ることにある。例えば、「青森」が生き残るためにすることは、「東京」に近づくことではない。生活の中に青森

のコンテンツを掘り下げていくと、世界と直接、接続することができる。そのために、青森の宝となる資料の保存や研究をする人材にお金をかけることが大切になる。

③なぜ、大学は「小論文」を入試に出すのか。

※参考 「小論文 書き方と考え方」(大堀精一著)

小論文のテーマというのは時代や社会の抱える問題が出題される。そこで大学側は、自ら学べる学生かどうかを小論文で見ている。そこで高校生に対して我々ができることは自ら学ぶための基礎学力をつけることと、問題を提示することだ。例えば、書いた小論文を相互評価する機会を設けることや学校図書館が基地局となり、本や資料を使って調べる力を育むことである。そのために地域の図書館や博物館、美術館などに行ってみる時間も生徒に対して用意することが大切になる。

④青森県内の図書館や博物館の問題

○日本で一番に登録博物館が少ない(進学率どころの騒ぎではない)

○棟方志功記念館の閉館

○青森県立郷土館、五所川原歴史博物館の閉館継続

地域の周辺に徒歩でいける立派な博物館や図書館少ない。そして、青森の過去を知る美術館が他県に比べて少ない。さらに問題なことは、青森県の学校図書に司書が圧倒的に少ないことがあげられる。青森県の高校の先生方は教育熱心なこともあり、生徒のレベルも高い。しかし、なぜ国公立の大学ばかりを目指させるのか。いったい世界にどのような大学があり、どんな学問が学べるのか、先生方個人では把握しきれない。だからこそ、生徒ひとりひとりの可能性を伸ばすためにも、紙も電子も、両方の情報基地として学校図書館を整備し、進路情報基地として活用することが大切になる。そのためにも専門の司書や情報専門職員を配置するのが、青森県の教育現場に必要なことだと考える。もしそれが可能であれば、地方にいたことがデメリットにならないはずだ。

⑤青森県の進学率向上について

○学校図書館に図書館司書と IT のプロを専従させる。

建物より人材育成などの予算を重点配分する。

図書館＝進路指導部＋情報（IT）で運営する。

図書館を過去から未来を探し出せる基地局にすることで進学率の向上につながる。

○青森県内の文化施設の充実を図る。

学校と博物館や美術館などと連携する。

生徒たちが住む身近にある施設を充実させる。

○高校に美術、音楽、書道、技術＋家庭の専門教員及び指導者を配置する。

青森こそ文化の最強コンテンツ王国かもしれない。

東京芸術大学の先生がおっしゃっていたことに「固定化した格差社会の中で、美術や音楽の分野は逆転できるコンテンツだ」ということから、芸術の専門教員を配置することにより、さらに青森の良さを知るきっかけとなる可能性がある。

①エンターテインメントのコンテンツが強い青森県

棟方志功、成田亮、高橋竹山、高木恭造など、アート・文学・漫画など最先端の人たちが出やすい地域。この地域性を活用し、文化・教育の地域格差、ハンデを逆手にとり、学ぶことによって世界中の様々な地域とつながることができる。

②文化、教育環境格差解消のための町づくり

一流の演劇や映画を上映できる町作りが必要で、他県の状況を踏まえながら美術館や博物館を整備し、利活用していくことが大切。町づくりの原点は、シビックプライド、文化をつくることから始めていくことが必要になる。

7 結論

今回の講演のタイトルにちなみ個人的に考察したこと。

- ①青森は濃密なコンテンツの宝庫だということを知ること。
- ②青森に生まれ育つことのメリット・デメリットを理解すること。貧困より文化の格差を認識する。
- ③青森県は怪物王国

県外から憧れる存在の文化芸術のトップランナーを輩出している。また、そうした人間を育てた優れた教師や友人が多く存在し、地元の文化の担い手として活躍し、地方出版で多くの本を書き残している。

そして、最後に。個人的な見解であるが、戦争の対義語は「図書館」ではないかと考える。弘前に初めて図書館を作った堀江佐吉らが、戦争でもらった報奨金を寄付してつくったのが旧弘前市立図書館。所蔵本の中には、敵国も含め、世界中の本が所蔵されていたことを考えると、読書をし、世界の文化を知ることによって様々な国の人々と理解しあい、二度と戦争を起さないようにするための基地が図書館だったのではないかと思う。図書館には世界中のありとあらゆる過去と未来があるように、何のために本をつくって残していくのか、そして、デジタル化の時代であるからこそ紙の本も必要があり、図書館を守り、生かしていくべきだということを伝えたい。

研究発表 2

「本校での図書館の活動」

青森県立三本木農業恵拓高等学校 田 中 館 優 子

1 はじめに

去年三本木農業恵拓高等学校へ赴任し、今年度、図書視聴覚部・図書担当になった。まずは、昨年度までの活動を踏襲していこうと考え、活動を始めた。

2 本校の特徴

農業科5科と普通科、合わせて17クラス。生徒数566名で構成されている。

3 テーマ設定の理由

(1) 図書委員の活動をひとつずつ取り組もう

研究発表のために特別なことをするのではなく、それまでのやり方を受け継ぎつつ、4月からの活動に繋げていくことにした。

4 さんのう図書館の概要

(1) 年間の貸出冊数

R2…174冊。R3…135冊。4人に1人の割合で借りられている。

(2) 貸し出し手続き

貸し出し手続きは、貸出簿にセルフサービスで行っている。CASAはデータが消えてしまったことがあり、それ以降は貸し出しには使用していない。

(3) 年間来館者数

3日に1~2人。来館者0の日がほとんどのため、カウントはしていない。

(4) 学習センターとしての機能

昨年は、同じ辞書を使わせたいという授業があり1~2回使用した。

5 三農生徒と図書館

(1) HR 教室からの距離

普段使用している教室から図書館までは遠い。生徒玄関から見ても、教室とは反対側に図書館が位置しており、別棟まで行くのは大変である。また、折角行ったところ、閉まっていたがっかりしたという声も上がっており、遠くからでもひと目で分かるような掲示を図書館サポーターが作ってくれている。

(2) 本との関係

朝読書の時間があるため、生徒は本を読んでいるはずである。しかし、本を借りてまで読もうという意識は低い。また、借りる冊数も多くはないため、身近なものとして考えられていないと感じる。

(3) 学習センターとして

生徒一人一人にタブレットが配付され、教師もICTの活用が進んでいる。そのため、紙媒体での図書館に求められる機能はほぼないと感じる。

6 さんのう図書館の移り変わり

(1) 令和元年~令和2年

書架の上まで本が積んであり、古い本が多かった。また、NDCがあまり整備されておらず、様々な本が混じって置かれていた。当時の担当者が整理したところ、過半数が廃棄対象本になった。2年間で2000冊廃棄した。しかし、廃棄本整理中に素晴らしい出会いもあった。青森県農学校時代の本で、発行年が120年前の明治32年に発行されたものである。バラバラになっていたNDC毎に整理をし、インデックスも備わった。六戸高校と十和田西高校が合併するため、2校からの管理替え予定の本のスペースも確保しつつある。

(2) 令和3年

恵拓高校が開校し、普通科と食品科学科が新設された。学年主任や教科主任にも協力をしてもらい、まだある古い本を選別し、食品科学科の図書を入れた。廃棄本は1000冊になった。

7 図書委員の活動

(1) 図書委員の仕事

- ① 図書の貸出と返却（放課後：受付カウンターでの作業）
- ② 図書（本棚、雑誌棚、新聞）の整理
- ③ 「図書館だより」への記事の寄稿（おすすめ本の簡単な紹介文を1人1回書く）
- ④ 蔵書の冊数調査の手伝い
- ⑤ 新刊図書の広告作成（今年初めての取り組み）

(2) 図書委員の構成・形態

- ① 図書委員の構成
各クラス2名×17クラス＝34名
- ② 形態
放課後1時間を2部制（30分×2グループ、3～4人配置）とし、カウンター当番を行っている。

(3) これまでの図書委員の活動

廃棄本選別の手伝いがほとんどで、新刊図書の紹介はしていなかった。R3は、コロナの影響により冬以降の活動を休止していた。

(4) 今年の活動

「図書委員のお仕事」に書かれている内容を、ひとつずつ、やっていくことにした。

- ① 図書の貸出と返却（放課後：受付カウンターでの作業）は、来館者が自分で書き込むため、委員の仕事はほぼない。
- ② 図書（本棚、雑誌棚、新聞）の整理は、4月から入ってきた1年生に本に触れてもらい、整理の仕方を4月から1ヶ月かけて教えた。本の扱い方、本の配架に基本（左→右。窮屈すぎず）、本の分類（見つけやすいように、NDC順に並べる）。また、本に触れることで、本は世界の事象を様々な分野から紹介しているということを知ってほしいと考えた。
新聞は全国版2紙と地元版1紙がある。月末に一月分を新聞種類毎に、綴り紐で綴る。その際、「さんのう」に関する記事を見つける作業を加えたところ、「さんのう」記事以外を読む委員も出てきた。記事を通じて自分の感想を話し、意見交換する場面も見られた。記事をもっと読みたいという意見も出てきたため、次回続きから読めるように付箋をつける工夫をした。
- ③ 「図書館だより」への記事の寄稿（おすすめ本の簡単な紹介文を1人1回書く）は難しいため、新刊図書のポップ作りと寄稿という割り振りにした。寄稿文は5人に依頼した。
- ④ 蔵書の冊数調査の手伝い
- ⑤ 今年初めての取り組みとして新刊図書の広告作成を行った。模造紙大の紙に写真やキャッチコピーを工夫して表現した。一週間ほどかけ制作し、生徒玄関から教室までの廊下に掲示した。

(5) ふりかえり

- ① 図書の整理を通して、仕事ひとつひとつに意味があることを知り、その目的に沿うようになった。興味関心を持つ生徒が増え、自分の意見を述べるようになった。また、意見交換の場としても盛り上がりを見せるようになった。
- ② 新刊図書の紹介を通して、複数の情報源から必要なものを取捨選択し、要約する経験ができた。工夫したりお互いのよい点を認め合う機会を得たりすることができた。
- ③ 全体的な所感として、タテとヨコの繋がりが生まれ、委員同士のコミュニケーションを取る機会が増えたと感じる。様々な活動を通し、意味のある仕事をしているのだという意識付けにもなっている。委員同

士で協力し合いながら、任された仕事を丁寧に責任を持って行うようになった。また、自分の得意を発揮できる居場所としても考えられる。改善点としては、新刊広告のアピールが足りなかった点と、今後クラス生徒と図書館を繋ぐためのアピールの工夫があげられる。

(6) これからできること

- ① 新刊図書のパップ作成
- ② 企画展の催し
- ③ 統合する二校（六戸高校・十和田西高校）の図書管理替え作業のお手伝い

質疑応答

質問： 文庫と新書の分類をやめて、本を並べたときに気をつけたり苦勞したりした点があるか。もともと文庫と新書があった棚はどのように活用されているのか。（三戸高等学校 佐藤美智子先生）

応答： 文庫も新書も両方入るように棚の板を外して、そのまま本を入れている。

（八戸東高校 手嶋久敦先生）

当てはまらない場合もあるが、学校図書館には暗いイメージを持っている。重苦しさを感じさせることが多い。もっと多くの生徒に来てもらいたい、本を借りてもらいたい、運営に当たった先人の皆さんは様々考えて策を講じてきたはず。しかし、どんなに頑張っても上手くいかない。その「怨念」が重苦しさとなって学校図書館に渦巻いているように感じられるのだ。

今回の手嶋先生の、昼食を図書館でとっても良いというアイディアは衝撃であった。重苦しさを吹き飛ばすような実践だった。淡々と話されていたが、実現までに校内の意見調整等、様々なご苦勞があっただろうと拝察された。その他にも様々なアイディアを出しつつ実践され、淡々とした口調とは裏腹に、本当に頑張っていらっしゃることが伝わってきた。

田中館先生には、ありのままを伝えるというスタンスで、コツコツコツコツ、淡々と積み上げていった実践を発表していただいたが、生徒達がどんどん変わっていき、生徒達が核となり、気持ちが上向きになっていったことが伝わってきた。何でも共通することかもしれないが、この「淡々力」が大事だと思う。諦めずに、どうしたら上手くいくか考え、少しずつ変えていく粘り強さが必要なのだと。

御講演いただいた丹羽先生の、巨大な図書館を一からお作りになったお話には圧倒された。そして世良さんのお話。青森の素晴らしい文化を伝えたいという思いから、世良さんは本（雑誌）という「場」作りをされた。図書館を作るということもまた「場」を作るということだと思う。学校図書館も同じ。新指導要領になり、学校図書館を学習センターとして位置づけよという追い風が吹いている。少しでも良い方に導くために、淡々と「場」作りの努力をしていくことが大事だと思う。